

[論 文]

エミール・ゾラ「恋の妖精」 フランス短編小説の旅（二十六）

俣 野 肇

0 旅の楽しみ

旅の楽しみは何だろう。有名な、つまり、一定の予備知識のある土地を、初めて訪れる。土地に詳しい人の案内を受けることもあれば、足のむくまま、知識を頼りに歩き回ることもある。あるいは、何かのはずみで、まったく知らなかった土地に出むくこともある。この場合も、案内人があったり、なかったり。それぞれの旅の形で、面白さを見つけたり、見つけなかったり。その結果、二度三度と訪問をくり返すこともあれば、一度で終ることもある（楽しさの有無にかかわらず）。

読書についても事情は同じである。ある作家や作品の知識を装備して読んでゆく。「研究者」という案内人の手を借りることもある。一回きりの読みで満足する（しない）こともあれば、二度三度と読み返すこともある。

読み返すのは、最初の読みにおいて、心にひっかかるものがあるからだ。初読が「満足しない」ものであっても、ひっかかるものがあれば、くり返して読む。読むほどに読みが深まり、新たな「ひっかかり」が生まれる。そう、真の読書は再読三読とくり返すことにあり、そこに「研究」の道が開かれもする。ある土地の訪問のリピーターの楽しみも同じこと、「バリの研究家」がいても不思議ではない。みごと新しい案内人の誕生である。

しかし、根本には最初の「ひっかかり」がある。旅の方針は、初読の際の読みを示すこと、つまり、「ひっかかり」を示すことであった。取りあげてきた作家の専門家（案内人）からすると、見当ちがいや浅はかさはあっただろう。あるいは読みの片寄りもさげがたかったであろう。だが、それでよい。すべては「ひっかかり」から始まるのだから。今回の旅も、この方針はゆるがない。

行先はゾラ（Zola）である。困難は最後までつきまとうのか、今回も原文が

（長編には事欠かないが）なかなか見つからず、ようやく目にした原文には翻訳が見つからない。当然、翻訳を示しながらの作業となった。

解読の手続きとして、まず全訳を示すこととした。その際、いくつかの段落（一段落の場合もある）を通した番号を付し、この番号にしたがって、後に解読をほどこした。原題は *La Fée amoureuse* である。Pierre Maury編の *Les trente meilleures nouvelles de la littérature française*（Marabout, 1986）から採った（pp.267-273）。

聞こえるかい、ニノン、12月の雨が家の窓ガラスを打っている。風が、長い廊下でうめいている。いやな夜だ。こんな夜に、貧しい人は金持ちの家の戸口で寒さに震え、金持ちはダンス・パーティで、きらきらのシャンデリアのもと、踊りまくる。サテンの靴をそこでぬいで、こっちに来て私のひざにのっかりなさい、そばの暖炉が赤々してるよ。たくさんつけてる飾り物はそこに置いて。さ、今夜は一つお話をしてあげるよ、すてきな仙女物語だよ。

こんな話なんだ、ニノン。むかし、ある山のてっぺんに、暗くてうす気味悪い古いお城があったんだ。お城といっても、小さな塔と城壁とチェーンを巻いたはね橋が残るばかり。鉄で覆われた男たちが夜となく昼となく狭間の上で見張っていた。そして兵士たちだけが城館の主であるアンゲラン伯の覚えがめでたかったんだ。

あの人、あの老戦士が長い回廊を歩くのを目にしていたら、もし、あの人の短く恐ろしい声の響きを耳にしていたら、おまえ、こわくて震えていたことだろうよ、あの人の姪、信心深くてかわいいオデットが震えていたのとまったく同じにね。おまえ、気がついたことはないかい、朝、ひなぎくが一本、太陽の最初のキスをうけて、いらくさと茨にまじって花開くのを。そのように花開いていたのだよ、あの娘さんは、荒っぽい騎士たちにまじって。子供のときには、遊びの最中におじを見かけると、立ちすくんだものさ、目に一杯涙をうかべて。今は、大きく美しくなっていたが、胸一杯に何ゆえともない切ない思いを抱いていたのだよ。それに、ひとしお激しく恐怖の念にとらえられたものさ、たまたまアンゲラン殿が姿を見せるたびにね。

娘さんは離れた小さな塔に住み、きれいな刺繍の旗じるしを縫っては、その手を休めて神様にお祈りしたり、窓辺からエメラルド色の野原や紺碧の空を眺めてすごしたりしていた。何度あったことが、夜、ベッドから起き出して窓辺に来ては星を眺めたことが、そしてそこで、何度あったことが、17歳の心が天空へと飛び出して、あの輝く姉妹たちに何ゆえこのように心がかき乱されるのかをたずねたことが。こんな眠れぬ夜のあと、こんな恋への思いの高まりのあと、彼女はあの老騎士の首っ玉にしがみつきたいと思ったものだよ。でも、荒っぽい言葉ひとつ、冷たい目つき一つで立ちすくみ、ふるえながら、縫い針をまた手にとるのだった。かわいそうなこの娘さんに同情するだろ、ニノン。彼女はみずみずしくかぐわしい花のようだった。その輝きと香りがさげすまれる花のようだったのだよ。

ある日、悲しみにくれるオデットが、夢にふけりながら、二羽のきじ鳩が飛び去るのを目で追っていたそのとき、城館の下のところ、やさしげな声をききつけた。身をのり出して見ると、一人の美青年が、歌をきかせながら、一夜の宿を求めている。彼女はしっかりきいてみたが、言葉は理解できなかった。でも、やさしい声に胸がしめつけられ、涙がゆっくりと頬をつたって流れて、手にしていたマヨラナの茎をぬらしていった。

城館は閉ざされたままで、武装騎士が一人、城壁から叫んだ

「行っちまえ！中に入れるのは兵士だけだ。」

オデットはずっと見ていた。涙で湿ったマヨラナの茎を落としてしまったが、茎は歌い手の足もとに落ちていった。若者は、目を上にむけ、この金髪の顔を見て、マヨラナの枝にキスするとその場から遠ざかった。しかし、一步ごとに後をふり返るのだった。

若者の姿が見えなくなると、オデットは祈禱台にむかい、長いお祈りをささげた。彼女は、自分でもなぜかわからぬまま、天に感謝していた。仕合わせを感じていたが、喜びのものが何かはまったくわからなかった。

その夜、彼女は素敵な夢を見た。自分が投げたマヨラナの茎が見えるように思われた。ゆっくりと、震える葉のかさなりの奥から、仙女がひとり起きあがってきたが、それにしても小さな仙女で、炎の翼、わすれな草の冠、それに、緑、希望の色である緑の長いドレスを身につけていた。

仙女はやわらかな口調でいった。「オデット、私は恋の妖精ですよ。私こ

そが、けさ、ロイス、あのやさしい声の若者をおまえのもとにさしむけたのです。私こそが、おまえの涙を見て、涙を乾かしてあげようと思ったのです。私は、あちこちの土地をめぐるは、心を拾い集め、ため息をつく心と心とを近づけるのです。私は、貧しく小さな家もお館もわけへだてなく訪れますし、羊飼の杖を王の杖に結びつけて喜ぶことがよくありました。私は守ってあげる人たちの足もとに花をまき、この人たちをとともまばゆく貴重な糸で結びつけます。だから、二人の心は喜びに震えます。私が住むのは小径の草であったり、冬の暖炉のはじける燃えさしであったり、夫婦のベッドのカーテンだったり。で、私の足が置かれたところに、キスとやさしい語らいが生まれるの。もう泣きやめなさい、オデット。私は恋の妖精ですよ、よい妖精です。おまえの涙を乾かしに来たのですよ。」

こう言うと、妖精はもとの花の中に戻り、花は、葉をたたんで、またつぼみとなった。

お前、よく知ってるよねニノン、恋の妖精は実際にいるんだよ。^{うち}家の暖炉で踊るのを見てごらん、そして、この美しい妖精がいるってことを信じないようなかわいそうな奴らに同情しておやり。

オデットが目をさますと、一すじの日の光が部屋を照らしていて、鳥の歌声がひとつ外から立ちのぼってき、朝風が、編んだブロンドの髪をなでていった。朝風には、風が花々に与えたばかりの最初のキスの香りがこもっていた。オデットは、うきうきして身を起こすと一日を歌ってすごし、よい仙女が言ってくれたことに望みをつないでいた。ときどき野原を眺めては通りすぎる鳥の一羽一羽にほほえみかけ、心の高ぶりを感じては、とびはねたり、小さな両手を打ちあわせたりしたものさ。

日の暮れになると、娘さんは館の大広間に降りていった。アンゲラン伯のかたわらに一人の騎士がいて、老伯爵の話に耳を傾けていた。娘さんは紡鐘竿を手にとると、こおろぎが歌う暖炉の前に座った。象牙の錘が、指の間で、すいすいと回った。

仕事の最中、騎士に目をやったところ、両手に握ったマヨラナの茎が目に入り、それで、ほら、騎士がやさしい声のロイスであることがわかった。喜びの一声がもれそうになった。顔の赤らみを隠そうと、灰の方へと身をかがめ、鉄の長い火ばしで燃えさしをかきまぜた。燃える火がはじけ、炎がうろたえ、

ざわざわと光の束がほとばしり出、と突然、火花のただ中から、恋の妖精が、にこやかに、いそいそと現れた。妖精は緑のドレスから、絹地に流れる、金のスパンコールのような火の粉をふり払った。妖精は室内に走り出ると、伯爵の目には映らないままに、若者たちの背後まで来て立ちどまった。その場で、老騎士が異教徒たちへの恐ろしい戦いの話をしている間に、若者たちにそっと話した

「愛しあうのよ、お二人さん。厳しくつらい老後のために思い出を残すのよ、残すのよ老後のために、まっ赤な燃えさしを前にしての長い物語を。はじける炎には、二人のキスの音しかまじりませんように。ずっと後、この甘やいだ時を思い出して悲しみを柔らげる時が来るの。16歳で恋をするとき、声はいらない。たった一目が思いを伝えるの、長々とした語りよりもね。愛しあうのよ、お二人さん。話をするのは老後にまかせておくですよ」

こう言うと、妖精は二人を翼で包みこんだ。だもので、伯爵は、鉄頭の巨人ブックがジラルダという重い剣の恐ろしい一突きをうけて殺されたいきさつを説明しているところだったが、ロイスが初めてのキスをわななくオデットの額にしたのを見はしなかった。

ニノン、あの妖精の美しい翼のことを話しておかなくてはね。翼はガラスのように透明で、小蠅のように小さかった。でも、恋人の二人が危うく姿を見られそうになると、大きく大きくなった上に、とても黒っぽくまた分厚くなったので、人の目はとどかなくなり、キスの音はさえぎられたのだよ。だから、老人は驚き一杯の話を長々と続け、長々とロイスは金髪のおデットを、意地悪な殿様の鼻先でいとしさ一杯で撫でたのだった。

そりゃもう、そりゃもう、何と美しい翼だったことか。娘っ子たちは、ときどき、この翼を見つけるんだってね。おじいさんやおばあさんの目から、そんなふうにして姿を隠すことができる娘さんが一人できないって、本当かい、ニノン。

伯爵が長い見聞談をおえるとすぐ恋の妖精は炎の中に姿を消し、ロイスは立ち去った。去りぎわに宿を許してくれた館の主に感謝の言葉を述べると、オデットには最後のキスを送った。その夜、この娘は幸せ一杯の思いで眠りについたものだから、夢に、何干という星に照らされた花の山を見た。星は、どれも、太陽の千倍もの明るさで輝いていた。

次の日、娘は庭に降り、暗いあずまやを探した。一人の兵士と出会って挨拶し離れようとしたその時、兵士の手の涙にぬれたマヨラナの茎が目に入った。そこで彼女はやさしい声のロイスだとまた気づいたのだった。ロイスは新たな変装のもとで城館へ戻ってきたところだった。彼は娘を泉の近くの芝地のベンチに座らせた。二人でじっと見つめあい、まっ昼間に会えた嬉しさをかみしめた。ズグロムシクイがさえずり、よい妖精があたりを動き回っているにちがいないという気配が空気の中にただよっていた。おまえにすっかり話しはしないよ、口の堅いカシの老木たちが耳にした二人の言葉を。恋人たちがこんなに長々とおしゃべりするのを見るのは楽しいことだった。おしゃべりがあまりに長かったので、横手の茂みにいあわせたズグロムシクイがその間に巣を作りあげたほどだ。

ふいにアングラン伯爵の重々しい足音が小道から聞こえてきた。かわいそうに恋する二人は震えあがった。しかし、泉の水はいっそうやさしく歌い、わき水のすんだ流れから、にこやかに、またいそいそと、恋の妖精が現れた。妖精は二人を翼でつつみ込むと、二人をつれて軽やかにすべるように進み、伯爵の横をすりぬけた。伯爵は、声がしたのに誰の姿も見えなくて、おおいに驚いた。

妖精は保護する二人をやさしく揺すり、二人に声をひそめてこうくり返ししながら進んでいく

「私は恋人たちを守る女、もう愛することのない人たちの目と耳を閉ざす女ですよ。こわがることはないの。すてきなお二人さん。愛しあえばいいのですよ、まばゆい日のもとで、小道の中、泉の水の近く、どこでもおまえたちのいる所でね。私はいつもそばにいて二人に目をくばっているのですよ。神が私をこの世につかわされました、人間ども、どんな神聖なものもからかいの種にするあの連中が来て、二人の純な心の動きを妨げることが決してないようにね。神は私にこの美しい翼を下さって、こうおっしゃいました、『お行き、そして、若い心が楽しい思いをしますように』と。愛しあいなさい、私がついていて二人に目をくばっています。」

そして妖精は、ただ一つ食べ物となる露を集めて進むかたわら、手をからませているオデットとロイスを愉快的なロンドへと誘いこんだのだった。

妖精が恋する二人をどうしたか、おまえ、ききたいんだろ。いやね、おま

えさん、それを言うのはちょっとな。心配なんだよ、信じてもらえないんではって、それに、二人の幸せをうらやんで、もうキスにお返しをしてもらえないんでは、ってね。でも、知りたくてたまらないって顔だな、いやな子。わかったよ、満足させてあげなくちゃいかんよな。

さあて、妖精がこんなふうに夜までうろついていたと思っておくれ。妖精が恋人たちを離して帰そうとしたとき、二人が悲しそうに、別れるのがほんとに悲しそうに見えたので、妖精は二人に声をひそめて話し始めた。妖精は何かしらとても素敵なことを二人に言っていたようだ、というのも二人の顔は晴ればれとし、二人の目は喜びで大きく見開かれたのだから。そして、妖精が話しおえ二人がうなづくとすぐ、妖精は二人の額に杖をあてた。

ふいに……おやニノン、驚いて目がまんまるだね！どれだけ地団駄ふむことかな、私が話をこのままにしたら！

ふいにロイスとオデットはマヨラナの茎にかえられた。でも、とても美しいマヨラナだったから、こんなのを作れる妖精は一人しかいやしないってものさ。二本のマヨラナは並んで置かれたが、すぐそばだったので、たがいの葉が入りまじっていた。これは魔法の花で、いつまでも花咲いたまま、永遠に香りと露とを取りかわすようになっていた。

アンゲラン伯爵はというと、なぐさめに毎晩語っていたのだとか、鉄頭のブックがジラルダという重い剣の恐ろしい一突きをうけて殺されたいきさつを。

で、これからの話だけだねニノン、野原に行ったら魔法のマヨラナを探して、どの花の中に恋の妖精がいるのかきくことにしようね。たぶん、ね、教訓がひとつ、このお話には隠れているよ。でも、暖炉の前にぼくらの足をのばしてこの話をしたのは、ただ、窓を打つ12月の雨を忘れてもらおうとしてのこと、また、今夜、この若い話し手へのちょっとばかり多めの愛情をおまえに吹きこめるならと思ってだけのことなんだ。

1 二項対立

冬の炉端で仙女物語が語られる。語り手は明示されない。年齢、性別とも

に不詳。《tu》と呼ばけられるニノンとの関係も不明である。「膝に乗せる」というところから、祖父が孫娘にお話を聞かせるという図式が浮かぶが、断定はむろん出来ない。「ニノン」という名から、あの高名な17世紀の貴婦人ニノン・ド・ランクロにからめた展開があるのかも……と思うのは、読みの妄想であり暴走である。ニノンは単に聞き手にとどまるのであるだろう。

12月。外は雨。廊下を寒風が吹きわたる。これに対して、暖かな炉端。型どおりである。しかし、寒暖の対照が人々の心にも及ぶ。わが家の戸口で震える貧者に思いをはせることもなく、暖かさのなかでダンスに興じる富者たちの寒い心と、そんな不公正を憤る語り手の暖い心。社会派のゾラらしい視点が入った。

これは、しかし、五つ六つの女の子に聞かせる言葉ではないだろう。ニノンはもう少し年長なのか、それとも、ニノンに語りかけるふりをして、読者に訴えかけているのであるだろうか。そもそもの初めから、語りの対象は、ニノンというよりも、読者であったということさえできる。雨は激しいものであろうから、耳をすませなければ聞こえないとは思えない（フランスの19世紀の建造物を想定しても）。それを「聞こえるかい」とは不自然である。つまり、この夜の状況を読者に伝えるための記号なのである。なお、社会派の視点¹は、妖精物語を語る炉端物語という構成上、発展することはないであろう。

貧富の対照を描いてみせる語り手は、みずからを富者とは思っていまい。ニノンはサテンの靴をぬぐことになるが、「雨音がきこえるか」と言う以上、ずっと室内にいたはずで、足を暖めるためにぬぐのである。サテンの靴はさして高価ではないものか。

寒さは、厳しさと暗さという二面において、仙女物語に引き継がれる。この段落は、山上の城館の、きびしい警戒のもとに軍の戒律が支配する暗い日々²を伝えたのち、すべてを支配し、軍人をしか評価しない城主の名をあげることで閉ざされる。段落全体が「暗くて厳しい城主」をきわだたせることに奉仕し、なだれこむ。奉仕過程の個々の表現・内容は置きかえ可能であるが、定型といってよい形が採られている。読み手も、「暗くて厳しい」城主というメッセージを受け取れば十分なので、「小さな塔（*tourelles*）」だの「城壁（*remparts*）」などの深い知識は不要である（＝読みとばし可）。ふきすさぶ寒風をこそ思うべきところであるだろう、仙女物語の語られるこの夜のように。

前段の帰結をうけて、城主の人物像が具体化される。要するに、こわい。武骨な軍人。「老戦士」とは城主その人のことであり、「剛」ひとすじの人である。幾多の血が流されるのを見、「柔」の危うさを知っている。だが、これも定番の人物像である。語り手がニノンにわが身のこととして想像させるのも同じ手口だ。そこに「オデット」という名、主人公でしかありえない名を出して、同一化をさそうのも。

定番にそって話が組み立てられている以上（定番かどうかの証明は、読書経験により自明としよう）、「剛 被害者 救済者としての柔」という展開の予想は容易に立てられる。被害者は当然「柔」側にある。「敵」に囲まれた一輪の「花」。比喻もまた定型的である。「ひなぎく」が選ばれたのは、野に咲く花を意味してのことだろうか。³「オデット」という名は、バレエ「白鳥の湖」を思わせる（曲は1877年作）。それを踏まえたものであろうとなかろうと、仙女物語にふさわしい命名であろう。

オデットは幸うすい娘、家族を失い、たった一人のおじを頼っている。しかし、厳しいおじになじめない。涙のなかで成長し、美人となった。思春期の常、恋に恋をし、「切ない思い（= *soupirs*）」が胸にみちる。だから、彼女の身持ちに目を光らせるおじのこわさが、いよいよ耐えがたいものとなる。

「定番」にそって、この段落はこのように読みとられていく。剛に対する柔の最たるものは恋である。薄幸の美少女の、禁じられた恋。しかし、そのためには恋する相手が必要である。その男性は、必ず登場するであろう。それに、仙女が恋の仲立ちをして、ハッピー・エンドが待っている。たぶん。

「待ち」の段落である。オデットは、当然のこととして、針仕事に明け暮れる。期待される娘像を生きるほかに道はない。離れた小塔で暮らす日々。城館の中央部から遠く離れた、一番はしの部屋。城主の心との距離の遠さそのままに。窓だけが、精神の幽閉状態に風穴をあけ、「エメラルド色」、「紺碧」の希望の色を見せてくれる。「解放」は、この窓とかわるのであろう。窓はまた、天上にも通じている。「輝く」星々。解放は、こちらからも来るのであろう。

オデットは閉ざされた日常から逃れたい。その願望が、解放者としての恋人さがしに結びついている（おそらく、過去の、「とらわれ」の女性たちすべてに共通のこと）。「恋の思いの高まり」ののち老城主の首っ玉にしがみつきたく

思うのはなぜか。おじさん、誰か見つけて！との心の叫びでもあるだろう。しかし、城主をここでは「老騎士」と記している⁴点に注目しよう。まさに彼女は「騎士」を待ち望んでいるのである。むろん、老騎士の目は冷たい。老騎士は、情愛を、柔を、恋をいみ嫌う兵士、いや、修道士、咲き誇る「花」は男を墮落させる悪魔の使者でしかない。

「飛び去る」、もとは《fuyaient》、「逃れ去る」である。きじ鳩はオデットの願望を実現しているのだ。と、窓の下、地上に、「現実」のものとして「夢」が実現する。「歌」は当然のB.G.M.である。同時に、歌声だけが青年とオデットとを結び絆となって立ちのぼる。若者であることしか視認できないのだから。

「城館」は、むろん、やわな歌声に耳を貸すはずはなく、解放者の侵入は拒まれる。試練が待ちうけるのも定型である。「おとぎ話」のたぐいに新軌軸はいらない。定型であるときり返し指摘してきたが、ゾラは定型を意図的に採用しているはずである。

この場面が「出会い」の形をとらずに終るわけではない。若者の足もとにところがつた花が二人の目と目を合わせることになった（であろう）。マヨラナへのキスは儀礼的なものだろうか？「ブロンドの顔（*tête*）」を見た若者は、一目ぼれをしたものと思われる。そして、マヨラナは、オデットの手からたまたま（＝神の配慮によって）すべり落ちたのではなく、若者の気をひくために、オデットによって投げ落されたものだ、無意識のうちにであるにしても。

第一の段落では、オデットは、恋に恋する自分の心を理解していないことが示される。若者が立ち去ってすぐ神に感謝しているのであるから、「喜びのもとが何か」わからないはずはないのだが、それほどまでに純心であるというのだろうか。いや、問題はそこにはない。これを聞くニノン、すでに恋なるものへの理解を持っていなければならないだろう。語り手は、「お年頃」のニノンに物語っている。「妖精物語」などは卒業しているにちがいないニノンに。語り手とニノンとの間柄に疑問が生じる。

後段は、夢の中への妖精の登場である。あのマヨラナから現れる。ここで、マヨラナはオデットが「投げた」と記される。ひとりでにすべり落ちたものではなかった。オデットは、やはり、マヨラナによって若者の注意をひこうとしたのであった。

妖精が恋にかかわることは「わすれな草」が伝えていようか。むろん、物語の進展状況から、そうでしかありえないのだが。誕生するビーナスのようにマヨラナの中から出現する以上、花の精であるだろう。炎の翼、緑色の服は、妖精として「光」に、つまり神に属することを示している。

2 仲 介

妖精は「やわらかな口調で」話す。「やわらかな」は《harmonieusement》、語義の第一は「調和して」。若者とオデットの恋がなめらかに進むことを暗示する。

妖精は、この日の嬉しい出来事を演出したと言う。夢の中にも現実の世界にもかかわることができるのは、妖精の力として当然のものだろうか。貧富の別なく恋の手助けをする、というところも、妖精物語としては当然の内容であろうが、ゾラの社会観を反映しているところでもある。⁵ 妖精は、自分がどこに住み何をするかを語ったあと、あらためて恋の妖精、よき妖精（神に属する妖精）であると言い、オデットの涙を乾かすために来たと言う。そう、オデットに、「おまえは恋をしているのだ」と教えているのであり、これをもって妖精の語りは閉じられる。

閉じられる。妖精そのものもマヨラナの中に閉じられる。城館の門が若者に閉じられたように。出現と消失、開と閉。2行からなる後段は、この物語の基本構造をさし示すかのように、きわ立たされている。

最初の段落のニノンへの語りかけは、ニノンに恋を誘うもののように読みとれる。「家の暖炉で踊る」など、いまここで恋が生じているかのようだ。語り手とニノンの間柄についての疑問が、いよいよふくらむ。

太陽の光、鳥の歌、朝の風、花々。オデットの幸福は外部から固められる。日の光がさし込んだ「部屋」とは彼女の心のことである。「立ちのぼる」鳥の声。立ちのぼるのは彼女の心の喜びであり、また、この話は、天上へと通じてもいる。

オデットは妖精の言葉に希望を託す。しかし、この言葉は夢の中でのものである。現実の世界で出会って語られたものではない。オデットは相変わらず純心である。この段落の後半は、鳥を仲立ちに、「とびはねる」(= *bondir*) が「立

ちのぼっていた」(= *montait*) に対応して、垂直の動きを示し続ける。「心の高ぶり」は原語は《*élans*》であるから、まさに「はずむ心」であって、針仕事（これを彼女は放棄している）に終始する「静」から「動」へと、部屋の表情は一変した。

夜になる。夜のとばりが「降りる」のである。オデットも「降り」た。空の夢から地上の現実へ。そこには例の若者がいるだろう。「騎士」は若者でしかありえない。それと気づかぬオデットは、現実の生活、針仕事に手をつける。しかし、こおろぎの歌がかすかに夢をつなぎとめている。

若者はアンゲランの話に耳を傾けている。騎士の姿をとることで、城の扉は開かれたにちがいない。城主は戦の話語っているのであろう。若者はオデットに会いにきた、わざわざ姿をかえてまで。

騎士に目を「やる」、原語は《*jeter*》を用いている。視線を「投げかけた」のだ、マヨラナを投げたように。《*jeter*》によって夢の世界が開かれてゆく。実際、若者は手にしたマヨラナによって認知される。そのときオデットは「身をかがめ」た(= *se pencha*) 初めて若者の歌声をききつけたとき窓から「身をのりだし」た(= *se pencha*) ように。身をかがめると、今度は妖精が現れる。

妖精の描写は「輝かしさ」「希望」を表す言葉でつづられる。夢の中のマヨラナではなく、現実の暖炉の火の中から「開かれ」た。夢の中で語ったように、ここでも語りがあるだろう。妖精は火の中から室内に「走り出」た。「走り出る」は原語 *s'élança*、直訳は「突進した」であり、オデットのはずむ心を伝える動詞のグループに属している。室内で城主が語るのは異教徒の話であるから、この仙女物語が中世時のものであることが明確となる。

妖精は予測のとおり語りを始める。その主旨は、青春の炎を燃やし、恋の思い出を作ること。若いときにしか恋はできない。ロンサールの有名な詩句⁶と響きあう。「たった一目」、この段の初めの「目をやった」と対応する。

ところで、「16歳」というのはオデットの年齢をふまえての一般化であるだろう。しかし、ここで具体的な数字が必要なのだろうか。語り手がニノンに「目をやって」いるようなまなましさを感じられはしないだろうか。ニノンと語り手の関係がいよいよ気にかかってくる。

最初の段落は、額へのキスによる恋の確立を伝えながら、恋なるものの武に対する勝利を、老いに対する若さの勝利を対照的に表現した。伯爵の話の内

容は他のものに置きかえ可能であるだろうし、巨人だの名剣であろうジラルダだの、いわれをさぐる必要はなさそうだし（読みとばし）。チャンバラ話が好きならば、確かに盛りあがるころだが。

後段は、恋の妖精に関する話し手の説明であるが、事実を伝える表現形式をとっている。妖精が実在したものとして語られている。⁷ 伝聞の形によってはいない。妖精物語の外の部分であるから、違和感がある。ゾラによる地の文としてなら許される表現ではあるが。「あの妖精」の「あの」は、直訳すれば「私の」である。私がしている話の、の意であろうが、私の作り出した、の意味とすればつじつまはあうが（作り話を前提として事実表現とした）それでは話の魅力は消えてしまう。ニノンに対して、事実として語ることで、話全体の真実性を強く訴えていると考えればよいのだろうか。とすれば、語り手とニノンの間にも妖精が現れるかもしれない⁸、と？

説明そのものは事実伝達として読み進めるだけである。ただ、「意地悪な殿様の鼻先で」が、武に対する恋の勝利を、前段にかさねて、強調することとなっている。「ジラルダという重い剣」と「金髪のおデット」とが、原文では、それぞれ、*Gilalda la lourde épée*、*Odette la blonde*と、同じ表現の形となって対照されていることにも注目すべきである。

前段。語り手は恋の妖精を見たことがある。美しい翼を見ているのだ。娘っ子たちも見たということだから自分の錯覚ではないよ、と、事実性を保証する。ニノンも妖精のお世話になったことがあるかい、というのが最後の文の共示。つまり、恋の経験をきいた。ニノンも、オデット同様16歳、語り手は探りを入れた、と受け取ってみようか。語り手が祖父ならば、孫娘の実際の姿を知りたかったのかもしれない。祖父でなければ、語り手は、ニノンに恋心を抱く男として、ライバルの存在を知りたかった。しかし、それだと、語り手とニノンが二人だけ（おそらく）で語り手の部屋にすることが不自然である。この二人の関係を物語が終るまでに明るみに出すことができるであろうか。

後段。伯爵の話が終り、妖精が姿を消し、ロイスは立ち去る。すなわち、すべてが再び閉ざされる。去りかけのロイスのキス、その夜の幸せな夢。最初の出会いのときの構造が反復される。花を照らす星々は、ロイスが現れる前、眠れぬ夜に窓辺から見あげた星に対応するが、その明るさがオデットの幸福感を物語る。星の光は希望の光から幸福の光へと変質した。

3 青 い 鳥

オデットは降りる。思いがけぬ発見、ロイスとの出会いという型は、すぐに成り立つ。オデットは「暗いあずまや」を探して降りたのだが、なぜだろう。城内のあずまやのありかは探すまでもなく知っているはずだ。探していたのは騎士ロイスの姿であろう。だからあちこちのあずまや（原文複数）をたずねて歩こうとした（初会での垂直の動きが、再会時の不動をへて、水平の動きとなった。恋の成立過程に対応するものである）。ところが、今度は兵士に変装していた。理由は不明である。騎士で受け入れられていたのだから。いや、同一人物が二日続けて訪問することはできないのかもしれない。それで兵士ということになった。マヨラナを目印として。

見つめあう二人。妖精の言う「視線」、物語を初めから支配している「見ること」がここでも核となり、鳥の歌が脇を固める。今は二人きり。昼（最初の出会いのとき）から夜（炉端でのキスのとき）へと切り変わった場面は、再び昼へと戻ったのだが、今は何の障害もない（閉ざされる門も聞くべき話もない）。この場面を演出したにちがいない妖精は、障害がない以上、姿を見せるはずがない。段落の最後、経過する時の長さを鳥の巣づくりの時間で示す技法は、言を待たず、定型である。ただ、段落の最後に原文では「巣」という語が置かれている点に注目する必要がある。この「巣」は恋する二人の巣、恋の完成を象徴するものとなっているのである。

「突然」。場面転換の常用法である。ここでは、すぐに、障害の発生が予測される。同時に、妖精の登場も。

障害はアンゲラン伯である。しかしB.G.M.（ここでは泉の歌）とともに妖精が姿を見せる。炉端では火の中から、いまは水の中から。火は情熱を、水は清純を表わすのであろう、二人の恋の。二人をつれて妖精がすべるように進むのは、恋の進み具合の順調さを示すものである。次にくる妖精の語りは、構成法にきちんと従ったものだ。

妖精の言葉はそのまま受けとるだけでよい。つまりは愛の讃歌。清純な愛が、障害に打ちかち、キスだけに心と体を通わせ、いま咲き誇る。妖精は、神につかわされたのであるから、守護天使といってよい。「あらゆる聖性を嘲る人」

との対比。この作品は、どこまでも、対比表現に満たされている。

美しい恋人たち、私の美しい翼。「美しい」という言葉も多用されてきた。青春は美しく移ろいやすい。老いれば、おしまい。聖性を信じぬ墮落も待っている。青春の美しさは、しかし、武に消費されてはならない。「おしまい」になる前に、人生を、恋を楽しもう。「もう愛さなくなる」前に。人生の蜜の時。妖精は蜜をしか食しない。

咲き誇る愛はどうなっていくのだろうか。それを語り手はニノンに明かしたくないという。理由は、話せば二人の幸福をうらやんでキスを返してくれなくなるだろうから。すなわち、語り手はニノンをそれほどまで幸福にはできないのだから。それでもニノンの気持を考えると、話さざるをえない。

これは祖父の言葉となるだろうか。二人をうらやんでキスを返さなくなる。「キス」は原語**baiser**。親愛のキスのやりとりであってよいが、その場合、「うらやんで」の説明が苦しくなる。「自分もこんな恋がしたい、おじいちゃんなんかにかまっていられない」ということなのだろうか。それにしても、ニノンはお年頃。ニノンと語り手、恋人同士でよいのではなかろうか。いや、語り手がここでニノンによびかける「おまえさん」は、原文では《mon amie》、「恋人よ」である。祖父の冗談ととるのはむづかしい。

愛のゆくえ。離れようとしないう二人を見て妖精は小声でささやく。泉の水にも、この物語を知っている語り手にも聞こえぬように。原文で、「小声で」のあと、《Il paraît que...》と続くのはそのためである。内容を推測して語り手は、直訳「何か美しい(= beau)もの」と言い、すべてが「美」に集約されている。恋人たちの顔も「輝やいて」、光の世界が完結する。

突然。今後は《soudain》が用いられているが、先の《tout à coup》と同様、予想外の事柄を導入する定型表現である。しかし、咲き誇る愛を維持するためには、老いの道を拒む愛のためには、並大抵の予想外事ではないであろう。魔法の杖は変身と結びついて了解されているから、そこで「突然」と言われれば、いや言われるまでもなく、ニノンは、そして読者は、驚きの目を見張って当然であろう。まさか変身の話⁹にたどりつくとは。どんな変身の話か、興味はいよいよそそられる。

マヨラナへの二人そろっての変身。恋の小道具であったマヨラナは恋の帰结点となり、永遠の「美」(*marjolaine si belle*)を誇ることになる。「輝きと香り

がさげすまれる「みずみずしくかわしい花」であったオデットは「香り」と露とをロイスと「永遠に」かわしあう。永遠に。二人は神の世界に、妖精という天使によって導き入れられた。

アンゲラン伯爵はオデットを嫌っていたのではないだろう。武人¹⁰としての愛を注いでいたのではなかろうか。だから「なぐさめ」を必要とした。しかし武人には武人の形しかありえない。同じ昔話をくり返して時の流れに身を委ねるほかはない。作品構成上「反復」は基本の技法であるにしても。また、「日常」の中に「異常」(＝オデットを失うこと)を包みこむことで、心の痛みはうすらいで(少なくとも見かけは)ゆくものだろう。「毎晩」語るところに老伯爵¹¹の思いは見てとれようか。

語られた物語のあとに、物語の結末が待っている。語り手は二ノンと連れ立って野原に出かける関係にある。¹² 恋に結ばれる関係かどうかは不明のままだ。しかし、野原ではマヨラナにたずねて恋の妖精を見つけよう、と言う。続けて、この話に「教訓」があるだろう、と言う。直後に、「しかし」で始まる最後の文がくる。つまり、教訓など重々しいことを言うつもりで話したのではない、ということである。では「教訓」とは何だろう。恋の妖精を見つけよう、と言ったあとに口にした言葉であるからには、恋にかかわる教訓でなければならない(現実の世界で純愛＝青い鳥は不可能だ、などなど、幾通りにも教訓は引き出せるであろう)。「しかし」、この語り手、「この若い語り手」 ついに語り手の実体が明示された。は、そんな大きな愛ではなくて、この物語を知って、今までよりほんの少し愛を深めてほしかった、と言うのである。

「ちょっとばかり多めの愛情」。語り手と二ノンは本当に恋人同士であったのだろうか。とすれば愛の妖精を見つける必要がなぜあるのだろう。見つける必要があるとすれば、二ノンの恋の相手を、あるいは、恋人同士ではない二ノンと語り手それぞれの相手を与えるよう頼むためではないだろうか。もちろん、恋の妖精を単に見つけないだけ、ということも否定しがたくはあるのだが。

恋人同士とした場合、二人は同棲中でなければならない。で、雨音がきこえるかときく以上、二ノンが外から入ってきたとは考えられないのだから。いま降り出したところと考えるのも、その後の天候の記述から、無理であろう。とすれば十分に深い愛が二人の間には存在する。恋人同士でないとするならば、

恋物語によって自分への愛を深めてもらおうとしたという語り手の言葉が理解できない。恋物語をした目的がそうである以上、深める愛を恋以外の愛とすることはできない。たとえ「若い」が反語的に用いられている可能性を思うにしても（つまり、語り手＝祖父）

こうして物語は謎のままに読みおえられることとなった。ニノンものの他の作品によって解決をはかるのは解説の方針にはずれる。また、正解がえられるとも限らない。というのも。「若い話し手」という語は、原文では作品の最後に置かれている。「若い話し手ってどんな人物なんだろうねえ」という、ゾラのいたずらっぽい微笑が見えるようだ。話の最初と終り（と）を照応させた技巧派のゾラである。語り手の謎は、きっと確信犯的なものであるにちがいない。

4 む す び

語り手の本当の意図は何であつたらうか。推測もまた解説の一つの喜びである。誤読のそしり、邪推の非難は覚悟の上で、その喜びにひたすることで読解をしめくくるとしよう。

語り手は、その言葉どおり、青年である。ニノンは、同じ建物内の住人で、お針子が何かの仕事をしている。語り手の部屋に遊びに来た。男の部屋に二人きりになってはいけない、という道德観のある女性では当然ない。語り手も、19世紀末当時の、一般の若者であり、建物も安っぽいものであろう。にある廊下は、部屋の外部のもの。暖炉があるのはどの程度の豊かさにつながるのか、

の、ニノンのサテンの靴とともに、判断を迷わせるが、無知は無知として読むのが方針である。結果に大きく作用する要因ではないだろう。

二人は好感を互いに抱いている（だからニノンはやってきた）。それを語り手は深めたいと思うが、ニノンは好意のままである。あるいは、さめかけている。そこで永遠の愛の物語をきかせた。もともと見知らぬ者同士のオデットとロイスを、二人の恋への衝動を知った妖精が結びつける物語を。だから、妖精が存在するものなら（実在性をなどで強調していた）その力を借りて真の恋人同士になろうよ、と言いたかったのであり、妖精がいらないにしても、こんな愛の物語をした気持を察して、もう少し真剣に愛してはくれまいか、と言いた

かったのである。

最後に読みの結果をまとめよう。この作品には、妖精物語としての定型の中に、緻密な計算が働いていた。象徴としての窓・鳥・歌。全体の基本をなす二項対立。夢と現実、静と動、開と閉、朝と夜。最初と最後の描写の照応。アンゲランの昔話りの場の反復。垂直・不動・水平という、恋の状況に応じた動きの変化。妖精の登場と語りかけのセット。夢と現実の二つのレベルでの混淆（夢と現実がかさなるオデット、物語の現実性を強調する語り手）。何よりも、最後に置かれた《jeune conteur》の二語。なぜ語り手が、あるいは作者が、そんな事を知りえたかという矛盾も散見されるが、これは19世紀小説そのものの持つ限界であり、ゾラを責めることはできない。闘う作家というイメージからは想像できないエクリチュールを讀えねばならない。

註

1. 社会派といっても、特定の思想的立場によるものではない。「ルーゴン・マッカール叢書」に触れて、尾崎和郎はこう記す、「そこには、巨万の富をきずくもの、権力の座を獲得するもの、あるいは逆に、貧困や破滅の道を歩むもの、無残な最後をとげるものなど、さまざまな人物がひしめきあっている。作者はこれら登場人物のあいだに優劣をつけようとはしない。高貴なものも卑劣なものも、それぞれの生命を極限まで生きるものであり、作者は彼らのその姿をそのまま描くのである。」（『若きジャーナリスト エミール・ゾラ』、誠文堂新光社、1982、pp.82-84。）それは、本作の妖精物語の部分の3人の登場人物についてもあてはまっている。
2. 場所・背景は簡略化しえるが登場人物は欠かせない、という、コント（お話）に関するジョルジュ・ジャンの指摘（cf. Georges Jean: *Le pouvoir des contes*, Casterman, 1981, pp.21-22）がここでも有効である。
3. ちなみに「ひなぎく」（*pâquerette*）の花言葉は「子供っぽい無頓着さ（*enfantine insouciance*）」とある（『フランス語ハンドブック [新倉俊一他、白水社、1978] による）。戦士たちの中におかれた少女オデットにはふさわしい花である。
4. アンゲラン伯爵は、状況に応じて、単なる「おじ」から、城主・老騎士・

老人等に言いかえられる。ここではオデットが救いの騎士を求めているのをうけて、「老騎士」が選ばれ、では昔語りをする人として「老人」と記される。

5. 客観描写で社会を描くゾラの目が「苦しむ人々」を支えようとするものであることをデュボワの言葉で確認しよう

「このような人々に対してこの作家は真の同情を抱いているのである、大げさな形はとらないのだが。」(Jacques Dubois : *Les romanciers du réel de Balzac à Simenon*, Seuil, 2000, p.240)

6. 念のため付言すれば、『オード集』の中の「摘むのだよ、摘むのだよ、きみの若さを/この花のように/老いが美をあせさせてしまう」のこと。
7. 「必然的逆説であるが、おとぎ話の類いは『真実の機能』と力をあわせる」とベシエールは言う。空想事・架空事は現実と人々との関係を壊すのではなく、現実に対処する人々の手段（道徳や行動のあり方）の堅実さや人々の主体性を保証するのである、と、それに続ける（ Irène Bessière : *le récit fantastique : la poétique de l'incertain*, Larousse, 1974, p.17 ）。ゾラのこの部分は、空想と現実の融合という意味で、ベシエールの言葉にある程度そうものであろう。
8. 上のベシエールと同じ方向で、直接ゾラに関して、デュボワは「夢の部分すべてをふまえた上で、フィクションはゾラにとって現実分析の道具である」と記す（ Jacques Dubois, *op.cit.*, p.248 ）。「妖精」なるものが存在しなければ恋は本当には成立しない、というのがここでのゾラの「分析」となるだろうか。とすれば、恋の世紀（19世紀）への決別の始まりとなる、醒めた目となる。
9. ジョルジュ・ジャンは、おとぎ話の類いでは「主人公たちは年をとらないか、とるとしてもわずか」であり、「変身は一拳におこる」と言う（ Georges Jean, *op.cit.*, p.67 ）。オデットとロイスも同様だが、とけてはならない魔法というのは異色である。とけない魔法（変身）という面ではナルシス・タイプとなる（とける魔法の、『眠れる森の美女』タイプとは対象をなす）。
10. 伯爵が妖精物語につきものの「障害」の役をになうのは、権力を持つ指導者ととらえられたからだろうか。バガレーは「ゾラは第三共和国の政治家たちを前体制の指導者たちに対すると同様に嘲笑した」と記している

(David Baguley : *Naturalist Fiction The Entropic Vision*, Cambridge University Press, paperback version, 2005 [first published 1990], p.151)

11. ミシェル・グラネは、ゾラの『パスカル博士』(*Le Docteur Pascal*) の分析の中で、登場人物たちと年齢とのかかわり方に触れている。例えばマクシムの持つ三つの顔、すなわち、過去の若い顔、今の老いた顔、将来の、さらに老いた顔 (Michel Granet : *Le temps trouvé par Zola dans son roman le Docteur Pascal*, Les publications Universitaires de Paris, 1980, p.77)、アングランとロイスはいわば同一人物の二つの顔であったのかもしれない。
12. ニノンとロイスの関係にあてはめれば、水平の動きであるから、恋愛関係が成立していると見ることも許されよう。